

Tonga Cave - World War II Japanese Hospital

Songsong Village

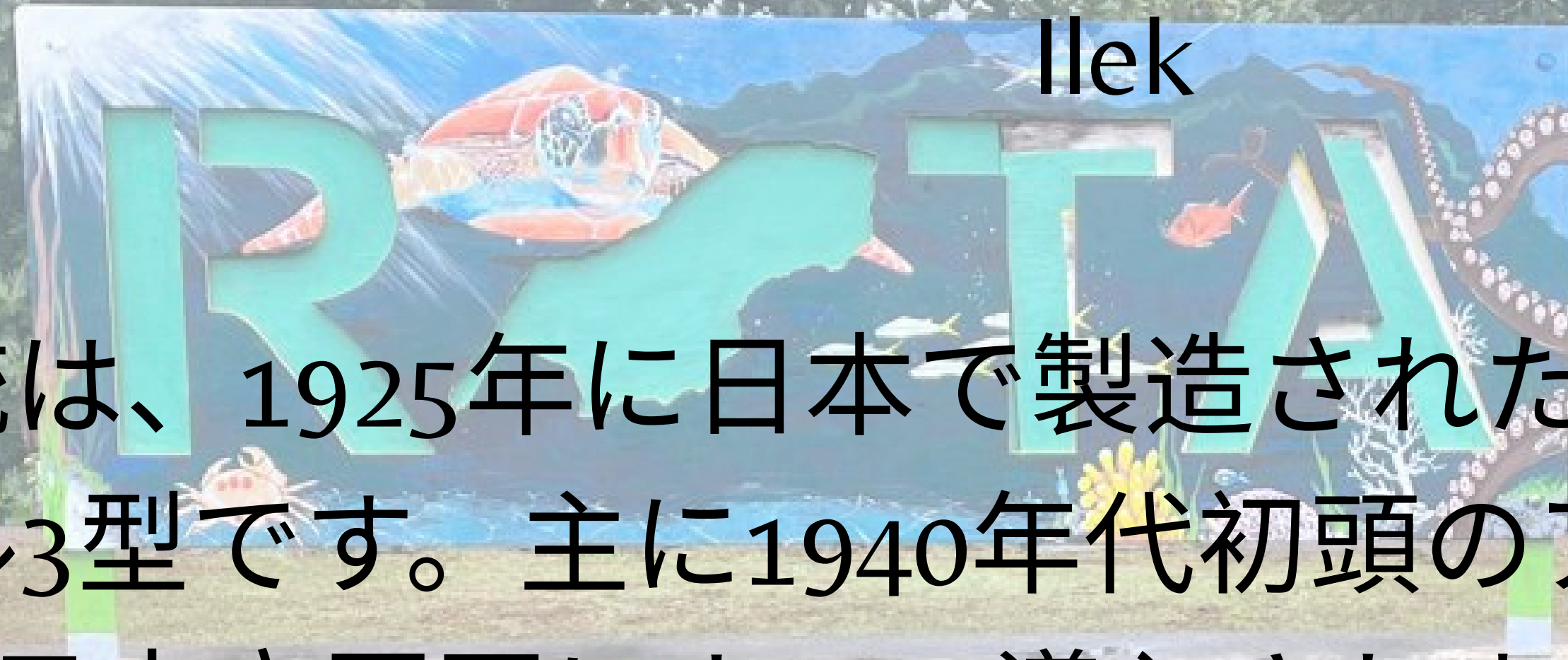
トンガ洞窟は、1940年代初頭の第二次世界大戦初期段階および戦後直後の期間、日本人民間人および軍人向けの臨時病院として使われていました。さらに、口々の住民は1950年代、1960年代、1970年代にかけて、台風や暴風雨からの避難所としてこの洞窟を利用しました。

Spanish Colonial Government House

Songsong Village

この建物は、19世紀半ばのスペイン植民地時代において、スペインの市長アルカディが居住していたとされています。歴史的に「カサ・レアル」として知られ、地域全体の行政業務を管理する中心的な行政施設として使われていました。この建造物は、当時のスペインの建築デザインと建設手法の重要な例であり、特に「マンポステリア」と呼ばれる種類のセメントを使用している点が特徴的です。さらに、歴史的記録によると、建物のすぐ近くに井戸が存在していたと言い伝えられています。

Japanese Coastal Defense Gun



この銃は、1925年に日本で製造された140ミリメートル、モデル3型です。主に1940年代初頭のアメリカ軍侵攻に備えて、日本帝国軍によって導入されました。この銃には、迷彩塗装がほどこされ、戦前の日本軍ササンハヤ港湾施設を見下ろす海岸の断崖沿いに設置されました。これは、迫りくるアメリカ海軍の戦艦に対抗するため、日本帝国軍が採用した数少ない防御戦略の一つです。

Ruins of Prewar Japanese Rectory

Tatachok

スペイン系出身の最尊厳なるフアン・ポンズ神父（S.J.）は、1930年代初頭の戦前日本占領期に、第二次世界大戦勃発直前の時期まで、教区司祭館に居住していたと伝えられています。これは、1920年代後半に建設された数少ない教会関連建築物のひとつで、当時、ソングソング村の繁栄する砂糖産業の拡大を目的として、チャモロの民間人がタタチョクへ強制移住させられた時期に建てられました。建築的には、スペイン時代の主要な建築要素と、日本統治時代の材料仕様やデザインを組み合わせた過渡期の建造物です。

Taga Ancient Latte Stone Quarry

As Nieves

古代のラッテ石灰岩採石場は、マリアナ諸島で唯一、ラッテの柱と蓋石の大部分が元の位置のまま残っている採石場です。この採石場には9本の柱と7つの蓋石から構成されています。学者たちは、スペイン人の到着とその後にチャモロ人との間で勃発した戦争が、採石場の作業を放棄させる原因となったと言われています。最大の柱の重量は約35トンと推定され、最大の蓋石は30トンと推定されています。これらの巨石のラッテ石を立てた場合、柱と蓋石の合計の高さは約7メートルに達し、テニアンのタガハウスで発見されたものよりも大きな規模となります。

Ancient Latte Village

Mochong

モチヨン考古学遺跡は、マリアナ諸島で最もよく保存され、最大のラッテ村とされています。この遺跡には、50を超える個々のラッテ石のセットが含まれており、このラッテ石の周囲や内部に埋葬された人間の骨格遺骸、磨石、工具、漁具、そして主に無文の陶器が豊富に発見されています。考古学調査によると、このラッテ村は3,000年以上にわたり居住され、利用されていたと報告されています。数多くの探検家の記録によると、ラッテ石はチャモロ人の住宅や男性用のウリタオやカヌー小屋などの専門的な建物の構造的な基礎として使用されていました。現在、これらのラッテ石は、私たちチャモロ人として誰であるかを表し定義する最も重要な文化的象徴とされています。

Ancient Latte Village

Alaguan

アラグアン考古学遺跡は、マリアナ諸島で記録された最大のラッテ集落です。この遺跡には、柱や蓋石を含む大小さまざまなラッテ構造物60基と、24基の臼型石器が確認されています。また、多数の埋葬跡、地表下から豊富な遺物、その他の遺物群も含まれています。

放射性炭素年代測定による科学的分析の結果、この遺跡は2,000年を超える期間（1442年～1630年）にわたって居住されていたことが示されています。さらに、アラグアン遺跡には、壁画（岩絵）と岩刻画（彫刻された絵）を有する洞窟が存在することが報告されています。

Ancient Latte Village

Ma'ya

マヤ・ラッテ地区は、ロタ島に点在する数多くのラッテ遺跡の一つであり、ほとんど手付かずの状態に残されています。その近接性から、モチヨン古代ラッテ集落と関連していると考えられています。この遺跡には4つのラッテ住宅があり、古代の工具や大量の素焼き陶器が発見されています。各ラッテ住宅は海と平行に配置されており、沿岸部のラッテ遺跡の多くに共通する特徴となっています。

Pictograph Cave

Chugai'

チュガイの絵文字洞窟は、マリアナ諸島における古代チャモロの岩絵芸術の中でも最も印象的なもののひとつです。この洞窟は、ラッテ期と関連していると考えられており、洞窟の反対側の壁に約90点の個々の画像が描かれています。絵は黒、濃い灰色、茶色の顔料で描かれており、おそらく鳥の糞（グアナ）と何らかの樹液、炭の混合物から作られています。これらの絵は、先祖崇拜の儀式と直接関連し、先祖とのコミュニケーションの手段として機能していたと考えられています。洞窟自体は、第二次世界大戦が始まった際に、一時的に日本軍の民間人および軍関係者が占拠していました。

WWII Japanese Fortification Defensive Complex

Ginalangan

ジナランガン日本防衛複合施設（指揮所）は、1944年7月のサイパン陥落後に日本帝国軍が開発した防衛戦略のマリアナ諸島における唯一の現存施設です。この戦略は、ペレリウ、硫黄島、沖縄で効果を発揮し、アメリカ軍を遅らせ、士気を低下させ、最大の人員損失を被らせるための「深部防衛」を重視し、以前の戦闘で日本軍が試みたような海岸線の防衛を回避するものでした。この新戦略では、日本軍は後方に撤退し、最後の兵士まで戦うための防御陣地を構築することが求められました。ロタ島はアメリカ軍に侵攻・占領されなかったため、ジナランガン防衛複合施設は戦争を破壊されずに、そのまま残っています。これは、戦争の最終段階で日本が採用した深度防御戦略に基づく要塞施設として、最もよく保存された例の一つです。

Prewar Japanese Sugar Mill Factory

Liyo' Songsong Village

南洋興業株式会社（NKKK）は、南洋開発会社としても知られ、1921年にマリアナ諸島に到着した際、同地域における主要な経済勢力であり最大の企業となりました。同社の執行役員で後に取締役会長となった松江治は、特に以前の日本企業によるサトウキビの栽培と加工の試みが失敗に終わった後、マリアナ諸島をサトウキビ産業の理想的な立地とみなしていました。NKKKは設立当初、重大な困難に直面し、事業停止の危機に瀕しました。しかし、1926年頃から状況が好転し始めました。1930年代初頭までに、松江は会社の土地保有をテニアン島に拡大し、事業拠点を口夕島にも拡大しました。口夕には1つの製糖工場があり、農地の約38%がサトウキビの栽培に充てられていました。この工場は年間約100トンの砂糖を生産していたと報告されています。残念ながら、戦争中の口夕に対する継続的な海軍の爆撃により、工場の構造物に深刻な破壊がもたらされました。

Prewar Japanese Hospital

Liyo' Songsong Village

戦前の日本病院の遺跡は、ソングソング村の南側に位置しています。主にコンクリート造の建物で、L字型の配置となっています。木製の床と屋根は既に破壊されています。南洋興業株式会社（南洋開発会社）は、ロタ島での砂糖産業事業の一環として、主に従業員のための病院としてこの病院を建設しました。戦前の日本占領期には、敷地内には学校として使用されていた他の2つの建物も存在していました。構造的な損傷は、第二次世界大戦の爆撃によるものです。

Bird Sanctuary Chenchon

口夕島東海岸に位置する口夕鳥類保護区は、多様な繁殖海鳥の群れが生息する重要な生息地です。この保護区は、地域最大級の海鳥の繁殖コロニーとして知られ、赤足ボウシ、白尾カモメ、大型フリゲート鳥など、多くの種にとって不可欠な生息環境を提供しています。保護区の自然景観は、口夕規制海洋保護区の一部を構成し、自然保護と野生生物保護区域として指定されています。

Peace Memorial

Sabana

平和記念碑は、第二次世界大戦開戦当初、日本帝国軍の指揮所として機能しました。1973年、ロタの住民と日本との友好の証として記念碑が建設されました。この記念碑は、第二次世界大戦の残虐行為により命を落とした日本人犠牲者を追悼し、その記憶を後世に伝えるために建立されました。

Japanese Tomb

Apanon

指定された墓は、第二次世界大戦の口々の戦いで命を落とした日本帝国陸軍の大尉・斎藤と同行の兵士たちを偲ぶため、その同じ場所に設置されたと伝えられています。

Japanese Tomb Pali'e

このお墓は、第二次世界大戦中の口夕の戦いで戦没した日本人国民を偲ぶために、その地に設置されたと伝えられています。

German Chapel Patten Gogue

コルビニアン神父とドイツのカプチン修道会の堅固な努力により、1911年ごろにカトリックの礼拝堂が建設されました。これはドイツ植民地時代に残る数少ない建造物のひとつであり、現在ではサンタ・ルルド礼拝堂として知られています。